

「困難を抱えた若者の就労・社会参加支援」シンポジウム開催報告

## ～困難を抱えた若者達との共働・共生をめざして～



当協会では15歳から39歳までの無業・失業者の若者を、ワークス・コレクティブやNPO団体への実習および就労のコーディネート事業を行っております。「若者」「働く」というキーワードで、地域で活動されている様々な立場の団体のみなさんが集まり、若者が置かれている状況を共有し、必要な支援について考えました。

まず、ありすの会（軽度発達障害のまなびの支援教室保護者OBの会）代表松下氏からは、困難をかかえている子どもたちへの理解や将来への展望について、ワークス・コレクティブキャリア（企）代表落合氏、並木氏からは、受け入れ



<アリスの会 松下さん>

体制作りにきめ細やかに対応し、若者の実習から就労に結びついている企業の取り組みについて、センター事業団理事 神奈川事業本部長 高成田氏より神奈川県内で社会的困難がある人の支援、若者の就労支援を行う中で「仕事起こし」の取り組みについて、千葉ワークス・コレクティブ風、下村氏より不登校・ひきこもりの親の会から生まれ



<風車の下村さん>

る」事業実践について、最後に当協会より困難を抱える若者の働き場や社会参加支援に向けたアンケート調査結果の報告がありました。

参加者は、若者の就労訓練、就労の受け入れ先となっているワークス・コレクティブや実際就労困難を抱える若者を持つ親や当事者、行政の方の参加もありました。

「当事者の問題と想っていたが、地域の様々な団体が困難を抱える若者について理解し、就労にむけて取り組んでいることを知ることができて良かった」との感想もありました。

ありすの会の松下氏より「学校を出てからも、コミュニケーションに課題がある。人を信じ、受け止める環境が必要」とのコメントがありまし



<会場からも家族の方の参加がありました>

た。企業の理解や体制づくりが進むことで若者の社会参加が進み、誰もが自分らしく働ける社会づくりへの運動をさらに進めてゆきたいと考えます。

（当初、今年3月に開催予定だったシンポジウムでしたが、震災の影響で6月開催となりました。無事開催出来ましたこと、また多数の方に参加いただきありがとうございました。）（上田 祐子）



<6月17日シンポジウム会場にて>

### 【外部の参加者の声から】

- ・「ワーカーズ・コレクティブ」について初めて学びました。新しい生き方、働き方の（仲間づくり等を含めて）1つだと思いました。
- ・ワーカーズ・コレクティブのシステムがわかったこと。自分らしく生きていく意味を改めて感じたこと。
- ・ワーカーズ・コレクティブ協会という組織が存在していたこと。こういう組織があることはとてもありがたい。ただ社会と接点を持つのが苦手な人たちが働く、研修するのにどうしても主になる職種が“サービス系”というのが今の現実なのだと実感しました。
- ・病気や障害も含め、その人のありのままが尊重され働ける、一人ひとりができることを持ちよって働くとのことで私にできることは何だろう。社会に貢献できることは何だろうと考えさせられました。人生に失敗はない、正解は自分でつくるもの、感銘を受けました。
- ・人から感謝されること必要とされているという実感が人の成長やりがいをうみだすのにとっても重要であること。お金でない価値は心の中に持ち続けようと思います。

### 「困難を抱える若者の就労・社会参加支援シンポジウム」に向けたアンケートまとめ

アンケート対象者：若者の体験実習や就労の協力事業者 44 団体 うち回答 33 団体

アンケート実施：2011 年 2 月

- ①ワーカーズ・コレクティブ協会が若者の就労支援を展開してから、この3年間で実習生が85人となった。アンケートに回答されていない団体でも実習の協力をしているので100人近い若者がワーカーズ・コレクティブで実習をした事となる。
- ②実習協力事業者は、前述したように配送、保育、デイ、食、店舗の業種に集中した。  
協会がこの事業を始める以前は、店舗や食に障害を持った方の実習や就労をしている実態があったが、協会が保育やデイ、配送などへ働きかけ丁寧にコーディネートした事で、業種が広がった。業種の広がりから他の支援機関からも、協会に実習の相談に訪れるケースが増えてきた。
- ③実習の経験から自信がつきそのまま就労に向かうケースから一般企業へチャレンジするケースもある。実習から就労へのステップは、事業者側の状況によるので容易に流れることができないが、体験実習から訓練に近い実習を行える事業者の存在は未経験な若者にとって心強いと思われる。
- ④「若者が就労できるためには」の項目では、「本人の

やる気」が一番であった。前述したように資格・経験・学歴重視ではなく、「人本位」の人を大切にする事業者としての回答と思われる。しかし、学歴社会・成績重視の世界で育った彼らにとって、全く想像を超えた世界である。「働きたい、働かなければいけない」と強く思っている彼らが、その縛りから解放されたとしても、「人本位」のワーカーズ・コレクティブがどこまで彼らを包括し共に働き続けるための環境を作ってあげられるか、これからの課題である。

- ⑤④と連動して、就労支援が継続的に行えるためには、事業者への支援策として助成金や税制優遇などの項目への記入が高かった。これは、自分達だけでは問題解決できないこと、社会的な問題として捉え、若者就労支援には何らかの制度が必要と言うことである。実習や就労の受け皿からさらに一歩踏み出し、協力事業者の参加を広げ継続を担保する制度づくりの必要が見えてきたと理解する。

⑥そのためには、ワーカーズ・コレクティブ協会が担う役割は大きく、困難を抱える人たちの就労支援・社会参加を推進している事業者の中間支援組織として、次のステップへの運動のリーダーシップが求められている。（おかだ ゆりこ）